

## 論文の内容の要旨

論文題目 他者との相互作用を通じた幼児の造形表現プロセスの検討

氏 名 佐川 早季子

本研究は、幼児が造形表現を行うプロセスを、他者やモノとの相互作用に着目して明らかにすることを目的とする。これまで、造形表現は、個人の「内から外へ」の内面の表出と捉えられてきた。しかし、造形表現は、周りの世界を認識し、周囲の人やモノとのかわりを通して、想像上の意味をつくり出す活動でもある。本研究は、このプロセスを明らかにするために、社会文化的アプローチの視座に立ち、「共同注意」の三項関係を手がかりに、視覚・身体・言語的位相での相互作用が相互に関連して、協働を支えるあり方を検討する。本研究は全3部8章からなる。

第I部第1章では、本研究で対象とする造形表現を、自由遊び場面における製作とし、幼児が他者と相互作用を通して表現を行うプロセスを検討する意義について述べた。そして、遊びが行われる文脈の中で製作を捉えるための理論的枠組みとして社会文化的アプローチの主要な概念である「媒介」や、「媒介」を通して捉えられる「共同注意」の理論について説明した。そして、視覚・身体・言語的位相の3つの位相における、共同注意に関連する行動を分析の視点とすることについて述べた。次に、乳幼児期から児童期にかけての製作研究を概観し、以下5つの研究課題を導出した。すなわち、①言語的位相での協働製作の成立過程、②他児の製作物の注視を通じた表現の触発プロセス、③幼児がモノを「見せる」行為の機能、④幼児間の関係性の変化に伴う相互作用の機能および製作プロセスの時期的相違、⑤「つくる」活動と「つくったモノで遊ぶ」活動の展開プロセス、の5点を明らかにすることである。

第2章では、上記の研究課題を検討するために、参与観察、微視発生的分析、ビデオ記録を用いた分析という方法を実施することについて述べ、第3～7章での研究方法の詳細について述べた。研究協力者は、神奈川県私立幼稚園の主に4歳児クラスであり、第3・4章で分析対象とした第1段階の観察は27回（120時間）、第5～7章で分析対象とした第2段階の観察は34回（約135時間）行った。記録方法は、自由遊び時間に複数の幼児が製作している場面を、ワイヤレスマイクをつけたビデオで撮影し、同時に、幼児の表情なども含めてメモした。観察終了後、フィールドノートを作成した。

第Ⅱ部では、観察で得られた事例に基づき、幼児が造形表現を行うプロセスを、視覚・身体・言語的位相という3つの位相での相互作用から検討した。

第3章(研究1)では、研究課題①言語的位相での協働製作の成立過程を明らかにするため、「何をつくるか」を表すモチーフ発話を4歳児1名が他児と共有して製作するまでの事例間の相違を、6ヶ月の時系列に沿って分析した。その結果、他児と隣り合う位置への位置取り、他児の製作物の注視、自分の製作物を他児に「見せる」行動が見られた後に、モチーフ発話が共有されていた。これより、まず、幼児は、他児の隣に位置取ることで(身体的位相)、視野を重ねる。視野が重なることで、他児の製作物を注視する行動(視覚的位相)が生起し、共同注意が成立する。そして、製作物やそれを使用する動作を見せることで(身体的位相)、他児の注意を想像上の意味世界に向け、言葉でも製作意図や意味が共有されるものと考えられる。このように、言語的相互作用の基盤には、非言語的な相互作用があると考えられる。

第4章(研究2)では、共起する諸位相での相互作用のうち、特に視覚的位相での相互作用に焦点を当て、研究課題②他児の製作物の注視を通じた表現の触発プロセスを検討するため、幼児の注視方向と幼児が採り入れた製作要素に着目した。その結果、幼児は相手の製作物を注視することで、自分とは異なる相手のアイデアに気づき、そのアイデアを実現した素材や製作手段の情報を視覚的に取得した上で、自分の製作に採り入れ、他児とは異なる独自のモチーフを生成するというプロセスが見られた。このプロセスに、きわめて短時間ではあるが、互いの製作物から注視を離すという段階が見出された。このことから、表現の触発には、以下のような微視発生的プロセスがあるという可能性が示された。幼児は、他児の共同注意を操作する行動により、他児のモノに注視を向け、共同注意の三項関係を成立させる。しかし、その後、いったん注視を自他の製作物から離し、注意を逸脱させることで三項関係を解体する。この段階を経て、自己と素材が対峙する二項関係を成立させ、独自の表現を行うというプロセスである。

第5章(研究3)では、身体的位相での相互作用に焦点を当て、研究課題③製作場面における「見せる」行為の機能を検討するために、4歳児2クラスの観察で得られた事例から、幼児が他者にモノを「見せる」行為を1回とカウントし、カテゴリーに分類した。その結果、大別して<製作結果の伝達>と<製作過程での交渉>の2つの機能があることが示された。乳児期の前言語的行動としての提示行動は、「私の領域内のもの」を相手に見せ、モノを通じて「私そのものを見てほしいという行動へと発展しやすい機構」をもつとされる(やまだ, 1987,p.156)。しかし、4歳児の製作場面においては、上記の「提示の関係」にとどまらず、相手と同じモノをつくったことを伝え、同志的な関係を取り結んだり、製作意図を表す言葉を伴って「やりとりの関係」を取り結ぶなどして、モノが幼児間の共感や交渉を取り持っていることが示された。身ぶりが言葉を伴うことで、モノに意味が付与され、多様なコミュニケーション機能を担うものと考えられる。

第6章(研究4)では、研究課題④幼児間の関係性の変化に伴う相互作用の機能および製作プロセスの時期的相違を明らかにするために、1年を3期に分け、各時期での抽出児2名の事例を考察した。その結果、幼児間の「見せる」行為は、親しい関係にある幼児間で交わされることが多く、その関係の質的变化に伴い、製作プロセスにも相違が見られることが示された。抽出児の事例の検討より、幼児が相手のアイデアを採り入れ自己の表現

を行うには、一人ひとりが固有の視点を備えていることを認め合う関係性が基盤となる可能性が示された。また、1年間の中でも、同じクラスの他児と共に過ごす時間や一緒に遊ぶ経験の蓄積などにより親密な関係性が形成されると考えられる学年最終期に、モノが媒介となり、製作から「つくったモノを使用する遊び」への展開が見られ、幼児間の関係性形成の重要性が示された。

第7章（研究5）では、言語的位相での相互作用に焦点を当て、研究課題⑤「つくる」活動と「つくったモノで遊ぶ」活動の展開プロセスを検討するために、「表現スタイル」(槇,2003)が異なると想定される抽出児2名の事例において、製作目的を共有する発話前後の言語的・非言語的相互作用について考察した。その結果、学年開始期の事例では、抽出児2名ともに、製作目的を言葉で共有するプロセスに共通のプロセスが見られた。製作物の完成を契機に、幼児が製作物を注視することで共同注意が成立し、そこで幼児が製作物を使用する動作や飾り付ける行動を行い、他児に見せることで、遊びの具体的なイメージが伝わり、製作目的が言葉で共有されるというプロセスである。ただし、学年最終期には、幼児個人の嗜好する「表現スタイル」が発揮され、ごっこ遊びの先行研究で示されている相互作用の発達的变化とは異なる結果が見られたことから、造形表現を伴う遊びにおいては、発達的变化だけでなく、幼児個人の「表現スタイル」の影響が大きいことが示された。

第Ⅲ部の総合考察では、これまでの研究をまとめ、総合的な考察を行い、本研究の意義を整理した。他者との相互作用を通じた幼児の造形表現の基本構造と、各位相での相互作用の連関性、相互作用を規定すると考えられる要因を示したのが図1である。

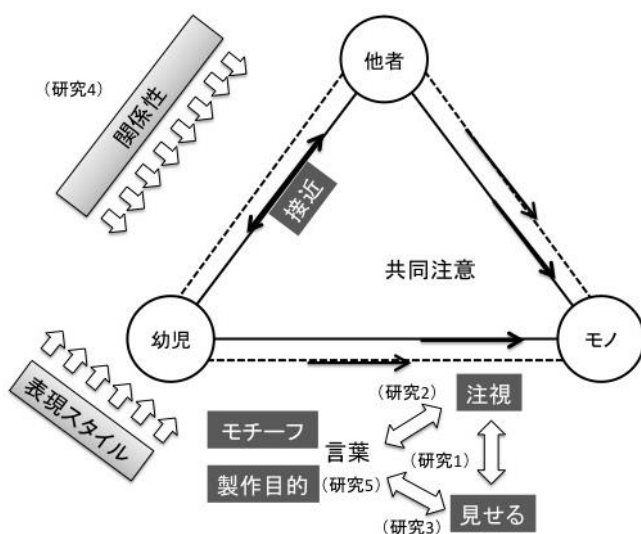


図1 他者との相互作用を通じた幼児の造形表現の基本構造

幼児が他児の近くに位置取り、視野を重ねることは、他児と同じモノを注視する行動につながり、視覚的共同注意（図1の実線で内側に描かれている三角形）を成立させるための前提条件となる。しかし、モチーフ発話などにより、ひとたび言葉で共通のゴールが共有されると、幼児は視野を重ねなくとも、互いの注意の向け先を把握しやすくなる。ここに、言葉（表象）による共同注意（図1の点線で外側に描かれている三角形）が成立する。このような中で、幼児は相互の視点の違いに気付くことが容易になり、様々なコミュニケーションが生じる。その一つが、モノを「見せる」行為である。「見せる」行為を通して幼

児は、相手を観客にして「私」を見せるばかりでなく、同志のような関係やパートナーのような関係を取り結んでいる。このように身振りが多様な機能を持つのは、幼児が言葉によってモノに意味を付与しているためであると考えられる。言葉というシンボルの道具により、モノに意味が付与されることで、モノは、単に製作に使用されるだけであった道具（第一次人工物；Wartofsky,1979）から、行為や意図・イメージ・心情を保存し伝達する製作物（第二次人工物）となる。幼児は、この製作物を共同注視し、製作物やその使用を見せること・見ることでイメージを共有し、想像上の意味世界（第三次人工物）を創っていく。幼児は、これらの視覚・身体・言語的位相での相互作用を通して、想像上の意味世界を協働で創造し、表現していると言える。

しかし、本研究では、三項関係の一つの項をなすモノの特性については十分に論じられていない。最後に、このような本研究の限界について論じ、今後の課題について考察した。